国際研究論叢　26（2）：131～139，2013

研究ノート

学習者の身体と情動を活性化させる英文学指導
：中学生から大学生まで

山　本　玲　子*

English Literature Instruction to Activate Learners' Bodies and Minds:
From Junior High School to University Students

Reiko Yamamoto*

Abstract

This paper reports on an attempt to utilize English literature as an active factor on students' bodies and minds. The power of authentic literature is exerted through the integration of junior high school and university instruction. Students in each stage of puberty are sensitive to language input which stimulates their physical senses and inner selves. Not focused on in English education recently, literature should be more highly valued. The students' output proves that they are capable of tasting a "non-first-language" when they are exposed to the heart of literature.

キーワード

インプット，アウトプット，英詩，情意フィルター

Ⅰ　はじめに

かつて，中学高校の英語教員の多くは大学の英文科出身であり，それは英詩をはじめとする英文学を修める場であった。近年，中学・高校の現場で英文学は軽視される傾向にある。指導者自身が英詩の指導法を知らない世代となり，敬遠傾向があることがその原因である（福田,2003）。直接社会で役に立たない英文学の講義が縮小されるのは時代の趨勢であろう。筆者自身，出身は英文学科であり，入学直後から，ここは埃をかぶった言葉を学ぶ場所だと感じ失望した覚えがある。しかし徐々にその奥深さを知り，英語の本当の魅力や美しさを知ることができた。即効性のある会話表現を学ぶことは確かに必要である。しかし，国語教育と同様，その先にある言葉の神髄に触れさせることにこそ，英会話スクールにはない学校教育の矜持があるのではないだろうか。本稿は，中学生に対する英詩指導の成果（山本,2009）をふまえ，大学生に対する英文学および英詩指導を構築した成果と考察を報告す

＊やまもと　れいこ：大阪国際大学国際コミュニケーション学部准教授〈2012.8.8受理〉

るものである。

Ⅱ　中学生に対する英詩指導

福田（2003）は，英詩は発音教材としても授業にうるおいを与える意味でも最高の教材であるとして，中学・高校で積極的に取り上げること推奨している。中学校の教科書の文章は無味乾燥あるいは単純な対話文が多く，詩は一学年当たり一作品ほどしか掲載されていない。O. Henryなどの英文学作品が掲載されていることもあるが，語彙制限のためダイジェスト版になっており，原書とは別物と言っていい。「生徒は時には本物に触れてみたいのではないか。生徒のそのような心の声に耳を傾ければ，『使いやすい本物』を提供することは，授業の効率を上げるために必要な工夫ということになる。詩は言葉の神髄である。本物である。」と福田（2003）は論じている。斉藤（2003）は,「英語をもっぱらコミュニケーション能力としてとらえる最近の英語教育理論のため，今では英語教師と英語文学教師が別の人種になってしまったかのようにすら見える。だが文学というものがもっとも洗練された言語表現である以上，文学作品を用いない英語教育はありえない。だとすれば，言語と文学の関係の修復，英学的なバランス感覚の回復が求められているのである。」と主張している。思春期に入る学習者は, 情意フィルター（Krashen, 1985）が増加する結果，言語産出に消極的になる傾向がある。したがって，統語上の正確さに拘泥するより自己意識的な情動を産出させることが重要になる。指導者はそれを意識したインプットを与える必要がある。箕浦（1984）は,「文化特有の意味空間の摂取過程は年齢に規定される面があり，個人の成熟によって規定されたシークエンス内で起こっている」と論じ，さらにそこに存在する感受期は15歳であると指摘している。英文学を用いた指導は，中学３年生以降の感受期にいる学習者の情動に訴えるものとなる可能性がある。

情動は，身体感覚と密接に関係している。リズムや繰り返しを伴う音を耳から入れるだけでなく実際声に出し身体感覚で浸ることで，学習者は身体感覚と同時に快感の情動を動かされる（山本,2008）。英語は，イントネーションをはじめとして，日本語よりはるかに音韻上の変化に富む言語であり，それが苦手意識を生み出す原因となっているが，逆に英語を楽しみ，英語への興味を喚起する要因でもあるのだ。福田（2003）は，英詩指導の際の留意点として，詩の韻律，脚韻，頭韻については詳細には説明せず，学習者に考える喜びを残すことも重要だと指摘している。「教えすぎない」「ゆっくりと楽しむ」ことを教師が意識することで，学習者に英詩の特徴を理解させ鑑賞させることができるという。このように，身体と情動の視座より行う英詩指導は，感受期にいる学習者には非常に適切なものであると言える。

山本（2009）は, 中学３年生に対し, Rossetti（1872）のWhat is pink?の詩を指導した後，実際に同じ形式で４行詩を創作するという指導を報告している。生徒は，韻律の仕組み及び韻律の変化を理解し味わうことができただけでなく，自らの内面を英詩という形式に乗せて表現することができた。このことから，生徒は，教師が予想するよりはるかに高度な文学作品理解の能力を持つことが示唆された。

Ⅲ　大学生に対する英文学指導

松村（1998）は，青年期の人間にとって感情の回復は切実な問題であり，青春期の人間は精神的危機を文学作品の力によって乗り越えるものであると論じ，日本の大学における英文学の衰退現象に警鐘を鳴らしている。さらに，数字によって計量できないものの価値を認め，想像の世界に身を置く体験は大学教育に必要であるとも論じている。若者の自立の行程，すなわち人間形成の行われ方の問題に最大の関心を向けてきたのが英国小説である（松村,1998）。本実践は，英国小説を題材に半期間指導し，文学への素地を培った上で，最終的に韻律文学のエッセンスともいうべき英詩指導へと昇華させる指導を構築することとする。対象者は，英語文学Ⅲを履修している14名の大学生（科目履修生２名を含む）である。

まず，年度初めに，中学生が創作した４行詩を紹介した。それに対する学生の感想は以下のようなものであった。

- 中学生の英詩がとても良く，聞いていて楽しかったです。授業の中でも英詩をやってみたいと思いました。
- 中学生に英詩を教えると，中学生が，詩や英語の面白さを新たに発見することが素敵だと思いました。
- 中学生の作品を聞いて，英詩でも英語でも，人それぞれの深い考えが伝わるものだと思いました。文学はもっと難しいものを想像していましたが，学ぶことが楽しみになってきました。この先，文学を学ぶことはあまりないと思うので，この授業で，しっかり学んで自分のために吸収をしたいです。

英語教員免許取得をめざす教職課程の授業でもあるため，履修者は教職をとっている学生が多い。そのため，中学生の感性や英語力に非常に興味を抱いており，軽視したり対抗心を抱いたりするというよりも，中学生でさえ英詩に挑戦できるという事実を，素直に自らの英詩への興味そのものへとつなげていった様子である。

最初の授業では，田村（1962）の詩行「帰途」も紹介した。この詩行を高く評価している新倉（1998）は，「詩は感情教育である」とし，若い人に，詩の言葉を媒介とし，互いに孤立している心への通路を開いてほしいと論じている。筆者が，英文学の授業でありながら日本語の詩を紹介した理由は，言葉を通して他者の気持ちに寄り添い，情動を動かす感覚は，英語でも日本語でも同じであることを感じ取ってほしかったからである。

ことばなんかおぼえるんじゃなかった
日本語と　ほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで
ぼくはあなたの涙のなかに立ちどまる
ぼくはきみの血の中にたったひとりで帰ってくる

上記のように「帰途」の一部を朗読し，半年後にはこの詩を実感できる人間になってほしいと言い添えた。しかしながら，授業後に回収した学生の感想文を読むと，「この詩の作者は後悔しているようだが，僕は外国語を覚えた方がいいと思う」といった的外れなコメントも散見された。行間の思いが伝わらず，字面通りの意味理解しかできないのは，文法など規則面の指導に傾斜した日本の英語教育の弊害であるとよく言われる。しかしこのケースが示すように，日本語であっても行間が読めない学生は明らかに増加している。国語教育，英語教育の枠を超えた言語教育の理念を，再確認する時が来ているように感じられる。言葉はルールの組み合わせではなく，発する者の思いや意味を，身体と情動で受け止めるための手段であることを，文学をはじめとする豊かな題材で体験させ続けることこそ，有効だと考えられる。

村上（1998）は，英文科以外の学生にシェイクスピアを読ませる講義を通し，「学生にとっては迷惑なだけ」「古典は難しすぎる上に，学習する意味がない」「現代の散文で力をつけ，韻文については余裕があれば読む程度でよいのでは」という先入観は誤りであることを実証した。学生は，次第に熱心になり，劇の世界に入っていったという。村上（1998）は，「シェイクスピアの言葉の意味，響きは，現在の英語から離れたものではない。確かに古いところはあるが，それだけに，そこには言葉のもともとの姿が豊かに表れていて，私たちの理解を助けてくれたりもする。」「シェイクスピアを読んだ時間，ジュリエットの台詞を覚えたことが無駄だったとは思えない。シェイクスピアは付け足しの知識ではない。英語の基本そのものなのだから。」と述べている。これはまさに，青年期の学習者の情意フィルターが，その身体感覚や情動の高まりとともに，大きく下がることを意味している。

本実践においても，シェイクスピアのRomeo and Julietを取り上げた際，学生は同じような反応を示した。英語における古典文法や古典語彙を含むミドル・イングリッシュに対し，危惧していたような抵抗感は皆無であり，むしろ英語にも古典が存在していたことに興味を示すなど，認知的発達段階にふさわしい知的好奇心を刺激された様子であった。例えば，That thou, her maid, art far more fair than she.というロミオの台詞について，下線部が誰を指しているかという問いに対しmoonという返答が正しく返ってきたことからも，学生が正確に理解していることがわかる。ロミオが月夜にジュリエットのことを褒め称えているモノローグであることを理解し場面を想像していれば，英語が難解であっても意味がわかるのである。韻文は音声化しなければ味わえないことを強調し，学生にも音声化させることで，その場面にあたかも自分が存在し，せりふが自分自身の内面の発露であるかのような錯覚を持つことにつながる。身体感覚と共に残る，意味・場面重視の英語指導をめざしたのである。高校の授業や受験を通し行ってきた分析的学習から脱却し，自らの身体感覚と情動を通して，英語という言葉の意味を感じ取る経験となったはずである。以下は，授業後の学生の感想である。

・シェイクスピアのせりふは，ストレートな表現で無駄なところがない。
・最近の映画を見たが，有名なせりふの感じが（原典を読んだ今日のようには）全然感じられなかった。
・ジュリエットの「ロミオ，あなたはどうしてロミオなの」というせりふだけ知っていたけれど，若さゆえに若い二人が追い込まれた状況がよくわかりました。
・「悲しみに時も遅い」「早い春には秋も早い」など，「時」を感じさせる台詞が印象的でした。4,5日間の移り変わりゆく出来事が，それらの台詞によって強調されているように思いました。
・情熱的な，愛情を伝えるせりふが良かった。
・とても印象的で本当につらい話でした。自分は，過去の経験から，傷つくのが怖くて恋愛ができません。よりいっそう，人を愛するのは難しいことだと思いました。

情意フィルターの高まる青年期は，自分の情動の動きをありのままに描写することに抵抗がある。しかし，この感想には素直な情動の動きが反映されている。学生が，無理やり古典を読まされたと感じているのではなく，純粋に文学の世界に浸っていたことが如実に伝わる感想である。

Ⅳ　大学生に対する英詩創作指導

半期の講義が終了したところで，Rossetti（1872）のWhat are Heavy?をモデルに，実際に４行詩を創作する活動を行った。

What are Heavy?

What are heavy?	Sea-sand and sorrow.；
What are brief?	Today and tomorrow.
What are frail?	Spring blossoms and youth；
What are deep?	The ocean and truth.

既述したように，それまでに中学生が創作した以下のような４行詩を，年度当初，いくつか学生に紹介してあった（日本語訳は筆者・以下同様）。

What are beautiful？	Women and blue sky；	きれいなものなあに。女性と青い空。
What are dirty?	Adult and garbage	きたないものなあに。大人とごみ。
What are near?	You and me；	近いものなあに。あなたと私。
What are distant?	You and me.	遠いものなあに。あなたと私。

上の詩には，大人への反発や，友だち（同性･異性）への距離感にナーバスになってゆく，

中学生の情緒的成長段階が如実に表れている。名作と言われる英詩に触れ，身体感覚や情動を豊かに動かしてきた後であれば，中学生でさえ，英語を通して自分の内面を表出することが可能になるのである。

対象となる大学生に対しては，さらに高度な韻文・散文を半年間取り上げてきただけでなく，サー・トーマス・マロリー，ウィリアム・ブレイク，ウィリアム・ワーズワースなど，長編詩を含む難解な英詩も，折に触れ紹介してきた。源氏物語を何度も聞けば漠然と意味がわかってくるように，教員によって情動豊かに音読される英詩は，聞く者の内面に必ずや何らかの意味を付与するはずだと考えたからである。

インプット活動からアウトプット活動に移行するに当たり，英詩創作に先行し，英詩音読を行った。好きな詩を選択して行う音読テストである。押韻を意識して音読することを条件としたが，履修学生全員が正確に押韻箇所にアクセントを置き，その結果リズミカルで情緒豊かな音読をすることができた。全員が首の上下などで豊かな身体運動を示し，さらに14名中３名は，手や足でリズムを取りながら歌うように朗誦した。英詩を通し，身体と情動が活性化していることがわかる。

最後に行った英詩創作であるが，未完でも可としたにもかかわらず，授業時間を過ぎても熱心に創作する学生の姿が印象的であった。そのうち,5つの作品（A～E）を以下に掲げる。

A

What are shining?	Sun and smile；	輝いているものなあに。	太陽と笑顔。
What are slow?	Turtle and time.	遅いものなあに。	亀と時間。
What are new?	Babies and idea；	新しいものなあに。	赤ちゃんとアイデア。
What are blind?	Ghost and future.	見えないものなあに。	幽霊と未来。

B

What are joyful?	Smile and future；	楽しいものなあに。	笑顔と未来。
What are delightful?	Life and nature.	喜びをくれるものなあに。	人生と自然。
What are angry?	War and strength；	怒ってるものなあに。	戦争と強さ。
What are sad?	Parting and death.	悲しいものなあに。	別れと死。

C

What are life?	Hope and shining；	人生ってなあに。希望と輝き。
What are change?	Mind and thinking.	変化ってなあに。心と考え。
What are effort?	Trial and learning；	努力ってなあに。挑戦と学び。
What are answer?	Liberty and nothing.	答えってなあに。自由と，存在しないもの。

D

What are strong?	Lion and superman；	強いものなあに。ライオンとスーパーマン。
What are weak?	Insect and human.	弱いものなあに。虫と人間。
What are bad?	Lie and violence；	悪いものなあに。嘘と暴力。
What are good?	Kindness and justice.	良いものなあに。親切と正義。

E

My feeling, red and blue.	私の気持ち，　赤と青。
My heart,　dead and bloom.	私の心，　　死と曇り。
You are just playing with me.	あなたはただ　遊んでいるだけ。
Still I love you.	でも愛している。
I shout on the stone.	石の上で叫ぶだけ。
I'm shut and alone.	終わって，そして一人。
My heart's never going to close to you.	私の心は決してあなたのそばには行けない。
I knew we had no choice.	知っていたわ，選択肢はないと。

Aは，具象物から抽象的な対象へ向かう視点が４行ともそろっている。B，C，Dは脚韻を踏んでいる。声に出して読んでみると，押韻のここちよい響きが，詩の内容に見られる青年らしいみずみずしさを際立たせている。押韻にこだわったためか，使用語彙がやや不自然な個所は散見されるが，それは大詩人でもよくあることであるという説明を，彼らは覚えていてくれたようである。Eは，ロセッティの４行詩に準ずる形で創作するようにという課題からはずれているが，完成度の高い詩である。１・２行目は脚韻と頭韻の組み合わせ（redとdead，blueとbloom），そして５・６行目はその逆で，頭韻と脚韻の組み合わせ（shoutとshut，stoneとalone）から成る。３・４行目のリズムと７・８行目のリズムはほぼ一致しており，いわば，aa・cc・bb・ccのパターンを取る８行詩と言ってよい。詩には形式が存在するが，その形式に乗ろうとすることはあくまで始まりであり，自らの内面がほとばしり出る時に，その形式が崩れることもある。しかし逆に，詩や言葉が内面と同化する境地に達している場合，内面のままにつづった言葉が，自然と形式に乗ってくるということも起こり得るのだ。Eの詩は，まさにその結晶と言えよう。筆者は音読してみて，Eの詩の風景は，詩という形式に凝縮されたからこそ，読む者の胸を打つ力強さを持つと実感した。反射的に想起したのは，「嵐が丘」の著者エミリー・ブロンテのゴンダール詩である。原始的な情動と感受性を素のままでたたきつけるように読み込んだエミリー・ブロンテの詩を，筆者は何度も講義で取り上げた。「石の上」「荒野」「叫ぶ」といった言葉を通し，高ぶる精神を吐露した詩は，まちがいなく学生たちに何らかの言葉の原風景を残したと思われる。中学生指導において，教科書や参考書にある例文や表現を「借り」て自らの英作文に織り込むことは，盗作でも模倣でもなく，ライティング能力向上のために欠かせない手段として奨励されている。大学生段階では，そのモデルを英文学作品に求める

ことが可能であることが明らかになった。

Ⅴ　考察

既述したように，中学・高校・大学の英語教育の場から英文学が消えつつあるのは，意味より形式やスキルを重視する風潮に加え，学生の能力に余るという先入観の蔓延が原因である。しかし，本実践は，学生の潜在能力の高さを実証する結果となった。青年期の情意フィルターが，身体と情動の反応を喚起することで取り除かれた場合，青年期ならではの豊かな感性で素直に言語インプットを受け止めることにつながる。青年期の感性や身体的・情動的反応が，時代とともに退化するはずもない。彼らの潜在能力を引き出したのは，ミドル・イングリッシュや韻文という難解さを超えたところにある，言葉の神髄だったのである。恐れをなさず興味津々でそれらに立ち向かう彼らの姿に，筆者が逆に教えられた。

英詩創作において，押韻することを強制したわけではないにもかかわらず，何とかして押韻詩を作ろうと悪戦苦闘する学生の姿には，英語・日本語の別なく，言葉に寄り添い言葉を乗りこなそうとする意欲が見えた。また，予定時間を超えて創作活動に打ち込み，完成した瞬間にほおを紅潮させていた彼らの姿には，無限の可能性を見た気がする。それは，僅か半年の講義で触れた豊かな文学・詩を通し，英語という言葉の豊かさ，美しさ，それによって心が動く自分の内面を発見した結果ではないだろうか。最後の授業での学生のコメントは以下のようなものであった。

- 表面の言葉ではなく，心から素直に出た言葉や想いは多くのことを教えてくれる，と感じます。英文学に触れ，日本語にはない音の表現を感じました。一つの単語，英語から多くを連想できる想像を与えてくれました。
- 英語文学に触れて，今まで自分の中になかった価値観や考え方，物のとらえ方を知れました。
- 詩の意味や結論は，一人ひとりの心の中にあるということがわかりました。心に浮かんだ気持ちや感動すべてが正解なのだ，と感じることができるようになりました。
- いろいろな物語を知ることができ，自分の今まで感じることがなかった感情も，身をもって感じることができました。僕は，人と人との関係を本当に大切にして生きて行こうと考えています。

筆者は国語教員の経験があり，国文学の豊かさを伝えることの重要性を十分承知している。しかし，母語以外の言葉でも，自分の感情が動かされる体験をすることは，世界中のすべての人間と豊かな関係を築くことのできる人となるための礎となろう。同じ物語，同じ詩に接しても，感じ方は人それぞれであり，情動の動きも個人により異なる。しかし，半年という期間が，そのような体験をする作品に１つでも巡り合うために，十分な長さだったとすれば幸甚の至りである。

参考文献

斉藤兆治（2003）『英語の教え方学び方』東京大学出版会
田村隆一（1962）『言葉のない世界』東京：招森社
新倉俊一（1998）「高められた言葉としての詩」『英語教育』第45巻,20-22.
福田昇八（2003）「英詩への招待」『英語教育』第52巻，東京：大修館書店.38-39.
松村昌家（1998）「今こそ英文学に学ぶべきとき：人間性回復のために」『英語教育』第45巻,23-25.
箕浦康子（1984）『子どもの異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究』東京：新思索社
村上淑郎（1998）「シェイクスピアを読んではいけませんか？」『英語教育』第45巻,17-19.
山本玲子（2008）「リズムと身体感覚を生かした『模擬対話』指導：実際の会話力につながる体験蓄積のための試み」『日本児童英語教育学会紀要』第27号,81-96.
山本玲子（2009）「中学生の豊かな言語産出能力を育成する実践的研究」『京都教育大学教育実践研究紀要』第９号,87-95.8
Krashen, S. D. 1985. *The input hypothesis*： *Issues and implications*. London： Longman.
Rossetti, C. G. 1872. *Sing-song*： *A nursery rhyme book*. NY：2Macmillan and Co.